



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代における朱子『家禮』受容に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	呉, 明熙
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11058号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53783
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Oh_MyoungHee_abstract.pdf, 「論文内容の要旨」



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏 名：呉 明 熙

学位論文題名

江戸時代における朱子『家禮』受容に関する研究

本学位論文は、儒教における冠婚葬祭など、その生活上の基本的な儀礼規範をまとめた朱子『家禮』をとりあげ、その成立背景と思想的特質を明らかにするとともに、同書が日本に伝来の後、とりわけ江戸時代において、山崎闇齋（1618～1682）およびその学問を継承する崎門派と称される学者が、それをどのように受容したかについて考察したものである。具体的には、崎門派を代表する学者として、浅見綱齋（1652～1711）とその高弟である若林彊齋（1679～1732）をとりあげ、前者の『喪祭小記』『家禮師説』、後者の『家禮訓蒙疏』への検討を通して、各著作の目的と特色を考察するとともに、崎門派全体における『家禮』受容の特質について解明を試みている。

なお、崎門派における『家禮』受容の様相を考究するには、何より山崎闇齋の著作をとりあげるべきであるが、山崎闇齋自身、『家禮』に関する専著を残していないことから、その学問を引き継いだ高足の浅見綱齋と若林彊齋の著述を主たる対象とするものである。

本論文は、第一部「朱子『家禮』の成立背景とその特質」と第二部「江戸時代における朱子『家禮』の受容」の二部から構成される。

第一部では、朱子『家禮』の成立とその構成について考究する。いうまでもなく、朱子（1130～1200）は、宋代を代表する思想家であり、その学問体系は、朱子学として中国のみならず、東アジア全体に多大な影響を及ぼしたことでよく知られる。その朱子が家庭内の秩序を整備すべく、編纂したのが『家禮』に他ならない。従来、朱子『家禮』に関する研究は、同書そのものに対する考察を中心に行われてきたが、本論文では、『家禮』への検討は勿論のこと、いままで顧みられることの少なかった『朱子語類』『朱子文集』に見える友人や弟子との会話・手紙まで対象を広げるとともに、同時代の司馬光『書儀』との関係や礼書『政和五禮新儀』の影響をも考慮する。そうした考察の結果、朱子は、当時、仏教儀式や俗礼が蔓延し、また『政和五禮新儀』が散佚したことなどによって、儒教儀式がほとんど実行されていないのを憂慮し、古礼に則りつつ、民間に流布していた礼書や礼説を参考にしながら、新たに『家禮』の編纂を企図したことを実証する。また、『家禮』には、しばしば「禮は時を大と爲す」という句が引用されている点に着目し、朱子は、一般庶民の経済的な負担を軽減できるような冠婚葬祭の礼書作成が必要であり、それは実践者が容易に使用できるような簡素な内容とすべきであるとの考え方に基づいて編集したことを論述する。

第二部では、朱子『家禮』が日本に伝来の後、特に江戸時代において、同書がどのように受容されたかについて、山崎闇齋の学問を受け継ぐ崎門派の中から、浅見綱齋と若林彊齋をとりあげ、前者の『喪祭小記』『家禮師説』、後者の『家禮訓蒙疏』について考究する。

第二部第一章では、浅見綱齋『喪祭小記』について論述する。『喪祭小記』は、『家禮』の中から通礼・喪礼・祭礼に関する儀礼を簡略に解説したテキストであり、元禄四年（1691）に著述されたと見做される。ただし、現在は『喪祭小記』という書名の他に、『通祭小記』『喪葬小記』とも称されること、またそれらのテキストが八種類存することからも推知される通り、文献学的な研究が求められるにもかかわらず、従前、それにはほとんど論及されることがなかった。本論文では、まず、現存する八種類のテキストを比較検討し、書名は『喪祭小記』『通祭小記』『喪葬小記』のごとく三種類あるが、その構成・内容から判断すると、大きく二系統に分類できること、また各テキストの間で異同が生じたのは書写者の相違に起因することを指摘するとともに、慶應義塾大学附属図書館所蔵の『喪祭小記』こそ、最も善本であることを論証する。加えて、その『喪祭小記』の内容を詳

細に検討し、浅見綱齋が、朱子『家禮』の中から、なかんずく通礼・喪礼・祭礼を抽出し、それらの礼を簡素化して『喪祭小記』を執筆したのは、『家禮』を日本の実情と風俗に適合させ、また誰もが使用可能な儀礼の手引書を編集するためであったことを明らかにする。

第二部第二章では、浅見綱齋『家禮師説』について考察する。『家禮師説』は、宝永二年(1705)、浅見綱齋が『家禮』の中から通礼・喪礼・祭礼をとりあげて講義したものを、弟子の若林彊齋が記録した、いわば講義録である。同書は、日本思想の研究者の間でも、いままでその全体をとりあげることが少なかったが、本論文では、東京大学図書館所蔵本を底本としつつ、全文を読解・翻刻した上で、それを詳細に考究する。その結果、浅見綱齋が『家禮』について講義を行ったのは、母親の喪服が契機となったと考えられてきたが、実際は、それに加えて、当時、江戸では仏教儀式が流布していたため、その影響を受けて、儒者の『家禮』に対する理解が不十分であり、そうした状況を批判すると同時に改善すべく、朱子『家禮』本来の趣旨を伝承しようとした点にあったことを指摘する。

第三部第三章では、若林彊齋『家禮訓蒙疏』について論究する。『家禮訓蒙疏』は、享保八年(1723)、若林彊齋が朱子『家禮』に対して注釈を施した書物である。本論文では、『家禮訓蒙疏』に見える山崎闇齋、李退溪、丘瓊山などの学者の言説に着目し、その内容を検討することを通して、若林彊齋が同書を著述した意図の解明を試みる。その考察を通して、若林彊齋は、『家禮』の儀礼を日本の実生活に適合させ、多くの人が使用できる簡素で便利な礼書を編纂するために、『家禮訓蒙疏』を執筆したと結論づける。また、若林彊齋は、当時、流行していた仏教に対しては、終始一貫して批判するものの、その影響を完全に無視することはできず、僅かではあるが、妥協をはかった部分のあることも指摘する。

以上、第二部全体の考究を通して、総じて崎門派の学者は、朱子『家禮』を受容しつつ、その簡素化を図りながら、一般庶民への流布をめざしたことを明らかにした。